

引き抜き屋の帰還

雫井脩介

第六回

引き抜き屋の帰還（二）

5

「うん、社長も今はちよつと苦しいだろうな」

小穂は仕事の合間を縫って、「フオーン」元副社長の坂下の自宅に顔を出してみた。

一年ぶりに会った坂下は、病氣療養のため、また少しほっそりとして見えたが、口調そのものはしつかりとされていて、まだまだ簡単にくたばるわけにはいかないと小穂に笑ってみせた。

この一年、小穂はヘッドハンティングという新しい仕事に集中していて、「フオーン」のことについては関心を断ち切っていた。意識的にそうしていたので、株価すら見ていなかった。

だから、「フオーン」新宿店の片見店長と話をしたときも、社内体制に変化が起きているというようなことは感じたものの、それが

苦境とまで言える状況であることには思いが及んでいなかった。「ジ
エレミア・ジャパン」のクリスの言葉で、はたから見ても「フォー
ン」が冴^さえない状態にあるのだと、初めて気づいたのだった。

少し調べてみると、株価も上場時の売り出し価格を大きく割りこ
んでしまっていて驚いた。昨年、公募増資をしたらしく、その発表
と同時に下がった株価は、いったん回復基調を示したものの、去年
の暮れあたりからずると下降線を描き続けているのだ。上場直
後には、買いが殺到して売り出し価格の一・五倍まで値が付いたと
きがあったのだが、そこから比べると、ほぼ半値になってしまった。

決算報告を部門ごとに見ても、明るさがどこにもない。売上が上
がっていけば、一時的に利益が落ちこんでいたとしても、回復の見
込みは持てるのだが、売上自体が減少傾向だから苦しい。当座の事
業に回せるフリーキャッシュフローもずいぶん細っている。父も頭
が痛いのではないながら、坂下に訊^きいてみたのだが、彼の見方も
同じようだった。

「俺には、社長の路線と大槻^{おおつき}くんの路線は、同じ方向を向いても
交わらないように思えるんだな。大槻くんに任せていたら、確かに
会社は大きくなるかもしれないが、何の特徴もないアウトドアメー
カーになるだろうよ。いや、アウトドアの看板も下ろすかもしれない
い。元はアウトドアグッズの製造も手がけていたアパレルメーカー

というところに向かうんじゃないかな。

でも、社長は彼を育てていくと決めたから、今は自分の路線から大きく外れないように手出し、口出ししながら、経営の一端を担わせているわけだ。だから、このところの「フォン」は、どっちつかずのでこぼ道を走っているようなもので、何をするにしても、スムーズには動かない。これが今だけの辛抱なのか、やっぱり駄目だったということになるのかは、もう少し見てみないと、何とも言えないな」

アメリカを中心とした国外の市場で大きな成功を収めるという目標は、父も大槻も同じなのだろう。

父は、今までと同じやり方でそれを成し遂げようと考えていたのに対し、大槻は目的に合わせて会社の形を変えていかなければ通用しないと考えている。その綱引きが、今の停滞感の一因になっているらしい。

自分が心配しても、どうにもならないことだなと、小穂は話を聞きながら思った。離れている間に、古巣が自分の知らない形に変わっていくのは寂しい思いも湧くが、それさえ、文句の言える筋合いのものではないのだ。

「ジェレミア・ジャパン」の面談は肅々と進んでいった。

一回目の面談はキャンディデートが個別に社長室へと招かれ、それぞれ一時間ほどをかけて、じっくり人となりが見定められたようだった。

クリスはそこで五人を残し、次の面談の場を青山の高級フレンチレストランに設定した。それから一週間置き、今度は虎ノ門のアンダーズ東京のバーを舞台にした面談が五日間続いた。

小穂は秘書の三浦みづらと連絡を取り合い、双方の日程調整をするだけだったが、食事や酒を交え、たっぷり二時間ほどかけて、相手のキャリアや経営哲学を訊き出す面談手法や、面談の場を全員統一して公平性を保とうとするクリスの姿勢には何の不満もなかった。誰がどう評価されるにしろ、選ばれるべき人物が選ばれる選考になるだろうと思った。

八月に入り、それらの面談が終わったある日、三浦から電話があった。

「キャンディデートを三人の方に絞らせていただきました。この三人の方には先ほど私のほうから通知させていただきましたが、次回の面談はアメリカに来ていただくこととなります」

アメリカ本社での面談のほか、エドワードの夏季休暇に合わせ、彼の別荘にも招くという。

「どなたが残りましたか？」

〈畔田さん、西内さん、高井さんです〉

畔田の名を聞いてほっとする一方で、「マツカーシー・コンサルティング」の柴沢が落ちたと分かり、厳しいなという感想が湧いた。どれだけ経歴が素晴らしくても、それだけでは通用しないのだ。

西内章介は外資系飲料メーカーの子会社で社長を務めた経歴があり、英国ランカスター大学のMBAホルダーでもある。高井徹は十代のほとんどをアメリカですごした帰国子女で、東京外国語大学卒業後、国内の投資顧問会社や中堅コンサルティング会社を経てプロ経営者に転じ、四十八歳にしてすでに四つの企業の経営経験を持つ強者である。リストを充実させようと、美南や井納が探し出した中から、これはと思う人物を捉まえ、十人の中に惜しげもなく注ぎこんだ結果、柴沢レベルの人材であつても弾き出されてしまうこととなった。

柴沢はプライドが高いから、そちらもしつかりフォローしなければならぬと思いつながら、小穂は最終選考に駒を進めた三人に電話をかけた。

「ひとまずは、おめでとうございます」

「まあ、予選落ちは逃れたみたいで、ほっとしたよ」

その日、とりあえずのお祝いと本社選考に向けての景気づけにと

誘ったらしく、「ガルウイング」の岩清水いわしみずが畔田わしたを伴って、「クラブ紗也加さやか」に姿を見せた。

岩清水が下ろしたシャンパンで乾杯したあと、小穂が改めてお祝いの声をかけると、畔田はいたずらっぽく言葉を返してきたのだった。

「あとのお二方も四十代にして実績十分の方々ですから、厳しい選考にはなると思いますけど、何とかがんばって、勝ち残ってくださいね」

「あとの二人って、どんな人なの？」岩清水がそんな問いを挿はさんでくる。

「立場上、詳しくは言えないんですよ」小穂は眉まゆを下げて答える。

「でも強敵なのは確かです」

西内と高井、どちらも優秀な人材だが、西内は根っからのインドア派らしく、今回、アメリカではエドワードの別荘に行つて、乗馬などを一緒に楽しむ予定になっていることを少し苦手に感じているようだった。その感覚は小穂も分かるだけに、「とにかく、チャレンジする姿勢を見せておけばいいと思いますよ」と、元気づける言葉をかけておいた。

それに対して高井は、「フォン」のこともよく知っているといるというアウトドア派で、釣りにゴルフにスキーと、趣味も多彩な男だ。乗

馬はやったことがないらしいが、むしろ一度やってみたかったから
楽しみだと言っていた。見るからにエネルギーシユで、頼りがいの
ありそうな雰^{ふん}囲^{いき}気を持ち合わせている男でもある。いいキャンディ
デイトを捉^とまえたと思^{おも}っていたが、クリスの眼鏡^{めがね}にも適^{かな}ったようだ
った。今の会社もプロパーの後継が育^もっているの、離^{はな}れることに
支障^しはないという。彼こそ、畔^か田^のにとっては一番の強敵^{じやうてき}と言^いってい
いかもしれない。

「鹿^{かの}子^こちゃんが気合^{きあ}入れすぎてリストを作^{つく}ったおかげで、くろべえ
が苦^{くる}しまなきやならないんだぞ」岩清水^{いわたしみず}がそう言^いって笑^{わら}う。

「何^{なに}言^いってんのよ。鹿^{かの}子^こちゃんががんばらなかつたら、リスト段階^{たんぱん}
で落^おとされてたかもよ」花^か緒^お里^りが小^こ穂^ほをフオローしてくる。「強^{じやう}
敵^{てき}がいつばいいるほうが、畔^か田^のさんも燃^もえるでしょ」

「まあ、でも実際^{じっし}、気持^{きもち}ちが乗^のってきてるのは確^たかかもね」畔^か田^のは
否定^{ひてい}しなかつた。「知^しれば知^しるほどいい会社^{かいしゃ}だし、クリスもクレバー
で信^{しん}頼^{らい}できる人間^{にんげん}だと思^{おも}うし。自分^{じぶん}を認^まめてもらって、この会社^{かいしゃ}で
力^{ちから}を試^こしたいって気^きにはな^なってるよ」

前^ま向^むきな言^い葉^はを聞^きき、小^こ穂^ほは嬉^{うれ}しくなる。

「乗^の馬^ばをするらしいですけど、振^ふり落^おとされ^されないように、最後^{さいご}まで
し^しがみ^みつ^ついて^いて^てく^くだ^ださいよ」

小^こ穂^ほは選^{せん}考^{こう}とかけ^けて、そんな^{そんな}ことを冗^{じゆん}談^{たん}めか^かして言^いい、畔^か田^のにエ

ールを送った。

「乗馬か……じゃあ、JRAの騎手に何人か知り合いがいるから、乗り方を教えてもらいに行こうぜ。乗馬教室とかもやってるし、頼めば、乗せてくれるだろ」

岩清水はそう言うと、早速、携帯を取り出して、騎手の誰かに電話をかけ始めた。やり手経営者らしく行動が早い。

その電話が終わるのを待ちながら二人の酒を作っていると、客が新たに入ってきたらしく、「いらっしやいませ」という黒服の声がエントランスから上がった。

「いやあ、社長、奥へどうぞ」

「じゃあ、失礼して」

聞き馴染みのある声の気がして、小穂はちらりと、隣のコーナーに座った客たちに目を向けた。

そして、泡を食った。

うわわ。

「社長、この手の店は？」

「いやあ、普段は銀座自体、めったに出てこないものですから」

もう一度、振り返って、おしぼりで顔を拭いている男を見るが、

小穂の父に間違いなかった。

「どうしたの？」 畔田が怪訝そうに小穂を見る。

「あ、いや……」小穂は笑みを引きつらせて、曖昧にごまかした。
「よし、くろべえ、明日、東京競馬場に行こう」

電話を終えた岩清水が畔田に話しかけているのをよそに、小穂は父のほうに背中を向けたまま、花緒里に顔を寄せた。

「花緒里さん、ちよつとの間、失礼します」

「え……どうしたの？」

ぽかんとしている花緒里に説明するのも省略して、小穂はゆつくり立ち上がる。父が帰るまで、更衣室に隠れていようと思った。

「あら、鹿子社長とおっしゃるんですか。ちようどうちにも、かのこちゃんって子がいるんですよ」

父の席に挨拶に出向いていた紗也加ママがそんな話をしているのが聞こえ、小穂はぎくりとする。

「かのこちゃん？ ねえ、かのこちゃん!？」

小穂の背中に、紗也加ママが遠慮なく呼びかけてくる。とても無視はできない大きな声で、小穂は立ち止まらざるをえない。

恐る恐る振り向くと、目を丸くした父と顔が合った。

「お前、何やってんだ、こんなところで!？」

父の仰天したような声が店内に響いた。

「いやあ、今日は面白いものが見れたなあ」

岩清水がカードを出してマネージャーに会計を頼みながら、そんなことをおかしそうに言う。

「フオーン」の社長が隣にいるなら、挨拶くらいしたかったけど、ちよつと難しかったなあ」

「あの空気じゃあねえ」隣で、畔田もくすくす笑っている。

「本当、生きた心地がしませんでしたよ」

小穂がそうこぼすと、二人は声を立てて笑った。

「でもほら、別に怒ってはなかったし、何なら、一生懸命がんばってんなあ、くらしいの感じじゃなかった……？」

小穂をこの店に引きこんだ立场上、花緒里はそんなことを都合よく口にした。

「怒ってなかったっていうか、呆^{あき}れてたんですよ」小穂は口をすぼめて言う。

確かに怒ってはいなかったが、父がぼそりと、「いい歳して何だと口にしたのは聞き逃さなかった。

「でもまあ、そのあと、盛り上がったみたいだし」

花緒里は無責任そうな笑みを浮かべて言った。

何かの商談ついだったのか、父に同行していた二人は「クラタ自動車」の人間だったらしい。その彼らが、小穂が娘であることを面白がり、父も開き直るしかないようだった。ただ、小穂も「クラ

「タ自動車」の二人に少し挨拶しただけで十分居心地が悪かったが、父も父で落ち着かなかったと見える。結局、一時間もしないうちに帰っていった。

それでも、思っていたよりは元気そうだなというのが、父の顔を久しぶりに見た印象だった。父も「クラタ」の二人も、話している声は明るかった。「クラタ」の商談と言えば、前に軽自動車の特別仕様車を作りたいという企画が持ちこまれ、父が断ったことがあったが、今回は前向きに検討できる類のものだったのだろう。

業績に多少の波があるとしても、心配するほどではないのかもな……小穂はそんなふうと思う。

「そう言えば思い出したけど、「フォン」って、「インフィニティ」と組んで、何かやるの？」

畔田が唐突に、そんなことを言った。

「いや、さつき一緒にいたのは、「インフィニティ」の方じゃないですよ」

小穂はそう返したが、畔田が言いたいののは、少し違う話のようだった。

「いや、ちょっと前の話なんだけど、「丸の内コンフィデンシャル」の戸ヶ里さんが、会いたってアプローチしてきてね」

「げっ」

戸ケ里の名が出たとたん、花緒里が顔を引きつらせた。

「おー、おー、世間は狭いね」

岩清水がからかうように、そんなことを言う。花緒里と戸ケ里の関係は彼らも知っているようだ。

「〔ブラウン〕時代の先輩から回ってきた話だったんで、一応会ったんだよ。まあ、結局、それも〔ジェレミア〕の件だったんで、話を聞いただけで断ったんだけどね」

今回の案件では、戸ケ里も畔田に声をかけていたらしい。

「それはともかく、彼と会ったホテルに、ちょうど〔インフィニティ〕のビリー・リーがいたんだよ」

岩清水が「ほう」と、うなり声を上げた。「インフィニティ」CEOのビリー・リーは、世界の富豪番付にも名を連ねる、大物実業家である。小穂も以前は名前を知るくらいだったが、この仕事を始めて、ビジネスニュースなどをチェックするうち、自然と海の向こうの経営者についても詳しくなった。

ビリー・リーは現在、五十代半ばくらいだろうか。強烈な上昇志向を持った経営者で、一代で巨大なアパレルグループを作り上げた。即断即決が信条であり、周辺企業の買収も積極的に進め、事業を急拡大させた。もちろん、それを可能にさせた背景には、経営者としての手腕があり、無駄を切り捨て妥協を許さない厳しさも、しばし

ば語られるものとなっている。

「そしたら、戸ケ里さんがその席に寄って、ビリー・リーに声をかけてね、ビリー・リーだけじゃなく、相手の人たちとも知り合いみたいな感じだったんだよ」

「おー、やるね元旦那もと旦那」岩清水がニヤリとして言う。「花緒里さんも、さすがにビリー・リーは知り合いじゃないでしょ。この店に来そうもないし」

「別に知り合いたいとも思わないけど」花緒里は冷ややかに言った。「でも確か、ビリー・リーって、ハーバードH・ビジネス・スクールS出てんのよ。その筋で知り合いなんじゃない？」

「それで、彼ら、英語で話してたんだけど」畔田が話を戻す。「『フオーン』の件で来てるんだ』みたいなことをビリー・リーが言って、戸ケ里さんも事情を知ってる感じで、『成功をお祈りしますよ』みたいな返事をしてっていう……そんなことがあったんだよね」

「何それ……戸ケ里が絡からんでるなら、絶対あくどいこと企たくらんでるわ」花緒里が決めつけるように言った。

「どこのホテル？」岩清水が訊く。

「マンダリンです」

「なるほど……ビリー・リーがいそうなところだな」

日本橋のマンダリンオリエンタル東京は、小穂も打ち合わせによ

く使うホテルだ。外国人利用客も多く、密談に向いたラウンジもある。

「本当に「フォン」の名を出してたんですか？」

自分の古巣と「インフィニティ」とがどうしても結びつかず、小穂はそう訊き直してみる。

「そう聞こえたけどね」

もちろん、畔田はアンダーソンスクールも出ているし、クリスとの面談も難なく英語でこなせるほどの語学力を有しているのは知っている。

しかし、この話は腑に落ちない。

「何か業務提携の話とかないの？」 岩清水が小穂に訊く。

「いやあ……「インフィニティ」と何を提携するのかって話ですよ
ね」

小穂としては戸惑うだけだ。

「買収とか画策してたりして」

花緒里がそう口にし、自分でも悪い冗談にすぎると思ったのか、
気まずそうに首をすくめた。

「いや」 岩清水が言う。「それ、ありうるんじゃない？」

「え？」 小穂は岩清水を見る。

「ビリー・リーは財力に物を言わせて、世界中のブランド力のある

ここに、手を出しまくってるからね。欲しいって思ったなら、がんが
テイクオーバー
ん 買収 かけてくるらしいよ」

ホステイル
「敵対的^{ホステイル}でってこと？」花緒里が眉をひそめる。「そんなの、なか
なかうまくいかないでしょ」

「そう。失敗も多いし、強引で印象も悪いから、けっこう嫌われて
るんだよ。ブランドバッグの「シュリンガム」とかさ、あとは高級
ダウンウェアの何て言ったっけな……ヨーロッパのそこそこのブラ
ンドなんだけど、経営ががたついてるところ見て、手を突っこむわけ。

でも、そういうところは、オーナー家の意見が強いから、「インフィニ
ティ」なんかには売り渡したくないって抵抗されて、失敗するんだ
よ。だから最近は、いろいろ策を練って、強引な手法を変えつつあ
るなんてことも聞くけどね」

「ダウンウェアって、「ウルソン」じゃないですよね？」小穂は気に
な^なって訊いてみる。

「あ、そうそう、「ウルソン」だよ」岩清水は思い出したように答え
た。

「「ウルソン」は「フォン」が買収したんですよ」小穂は言った。

「オーナー家は経営陣に残ってますけど、「フォン」は五〇何パー
セントかの株を買ったはずですよ」

「そうなの？」岩清水はさすがに知らなかったらしく、目を見開い

てみせた。

「そしたら、「フォン」から「ウルソン」株を高値で買い取る交渉でもしてるとか？」花緒里が憶測をおくそく広げてみせる。

今は「フォン」も経営に余裕がないだけに、子会社を切り売りする可能性はありうろと思う。しかし、経営の中枢ちゅうすうに陣取っている大槻がわざわざ動いた買収案件であるだけに、そうは簡単に手放すとは思えない。

そこまで考えたところで、小穂は、その大槻が戸ケ里によって「フォン」にヘッドハンティングされてきたことを思い出した。

そして、その戸ケ里はビリー・リーとつながっているらしい……。何やら、きなくさいのは確かだ。

「意外と「ウルソン」だけじゃなくて、「フォン」もろともなんて考えてても、おかしくない気はするな」

岩清水の言葉にうなずいたのは畔田だった。

「お節介せつかいかもしれないけど、一応、お父さんの耳に入れておいたほうがいい気がするよ」

「はい……」

小穂は素直に応えておいた。

とはいえ、父とはバイトの最中に出くわし、気まずいことこの上

ない関係である。何もなかったかのように電話をして、まったく違う話をするというのも、なかなか難しい。

二日ほどしてから、小穂は様子見に、実家の母に電話してみた。

〈小穂？ 何？ どうかした？〉

めったにかけない小穂の電話を受けた母は、いつもと変わらない様子だった。

「いや、別に用事はないけど……お母さん、元気にしてるかなと思っ
て」

〈そうねえ、夏バテ気味ではあるけど〉

どうやら父は、先日の件を母に話していないらしいと察した。

「お父さんは？」

〈うーん、私よりお父さんのほうが、最近は元気ないかもね。あなた、たまには顔見せに帰ってらっしゃい。お盆は何か用事あるの？〉

「いや、特には」

〈じゃあ、お盆は帰ってらっしゃいよ〉

結局、母とはそんなやり取りで終わった。もう十日もすればお盆になる。父には、実家に顔を出したときに言っておけばいいかと思っ
た。

それからしばらくは、「ジェレミア」以外の案件で動き回る日が続
いた。「ジェレミア」については、三浦が畔田ら三人の往復航空チケ

ットや滞在先を確保してくれ、小穂は出発する前の彼らに電話で一言声をかけるだけだった。三人は日程を細かくずらしながら、アメリカ本社での面談を受け、エドワードの別荘ですぐすことになっている。仕事を持っていても夏季休暇を利用してこなせるよう、スケジュールはお盆時期に重なっている。お盆前にはそれぞれが順番に旅立っていった。

「インフィニティ」の件についても、忘れたわけではなかった。父に会うまでに一通り調べてみようと思い、「インフィニティ」に関する雑誌の記事を集めたり、三田会で知り合った経済新聞の記者に、ビリー・リーがどんな経営者か訊いたりした。

経済新聞の記者によるビリー・リー評は、岩清水のそれとほとんど変わらなかった。昨年、銀座に大型路面店を構えてから、日本にはほぼ毎月のように来ているはずだという。

そこで小穂は、仕事の打ち合わせや面談などの場所を、しばらくマンダリンオリエンタル東京に集中させることにした。約束が入っていない空き時間なども、頭の中を整理したり各所に電話連絡したりするのに、そのラウンジを使わせてもらった。ヘッドハンターの仕事は、その気になれば、一日、ホテルのラウンジで済ませることがができる。もつとも、そこまで長居はできないが、それでも半日近くはそこに居座る日々を続けてみた。

お盆に入った十三日、実家に帰るのは十五日あたりでいいだろうと、小穂はその日も何件かのアポを入れて、午後から日本橋に向かった。

マンダリンオリエンタルのカフェラウンジを覗くと、ビジネスマシラシキ姿は少なめで、外国人を含め、くつろいだ格好の観光客風の人々がソファに背を預け、お茶を楽しんでいる様子が目についた。小穂はスタッフに勧められたソファまで歩きながら、ほかの客席に視線を向ける。すると、観光客風の人々に溶けこむような、ラフなシャツ姿の男が、少し離れたソファに座っているのが目に留まった。

小穂は自分の席に着いて、いつもの飲み物を頼んでから、ちらりと振り返った。やはり、ビリー・リーに間違いない。連れの男は秘書か通訳だろうか。隣に座っていて、見た感じでは、商談相手ではないようだった。

その後もちらちらと様子をうかがっていたが、特に変化がないまま、小穂の打ち合わせの相手が姿を見せた。小一時間ほどはリーのことを頭から追いやって、淡々と打ち合わせをこなした。

「ありがとうございます。私、別件がありますので、ここで失礼いたします」

「そうですか。では、引き続きよろしくお願いします」

しばらく立って相手を見送ったのち、小穂は思い出してリーの席を見やった。

二人のスーツ姿の男が、リーの真向かいに座っている。小穂の席からは、背中しか見えない。

小穂はスタッフに飲み物のお代わりを頼み、手洗いに立ちがてら、
件の席をそれとなく観察した。

背中を向けて座っている二人のうち一人が、隣の男のほうを向いたところで、その横顔が一瞬、小穂の目に入った。

戸ヶ里だ。

手洗いで用を足し、気持ちを落ち着けてから、ラウンジに戻る。

隣の男は誰だ？

今度はさらに、彼らの席に近いところを歩きながら、その様子を見かねてみる。

後ろ姿は大槻に見える。わずかに耳に届いた声も、大槻の低いそれを思わせるものに聞こえた。

しかし、小穂自身の頭に、大槻を疑う気持ちがあるせいかもしれないなかった。

いったん自分の席に戻ったものの、戸ヶ里と一緒にいる男が気になり、小穂はまた立ち上がった。何の気なしにラウンジ内をうろつくようにして、彼らに席に再び近づいていく。ゆっくり回りこみ、

戸ケ里の隣に座る男の横顔を盗み見てから、さっと、死角になって
いるそばの柱に身を寄せた。

やはり大槻だった。

リーが何やら彼に、熱心に話しかけている。

声自体は小穂の耳にも届くほど大きいのが、英語なので、なかなか
聞き取れない。

小穂はスマホを手にして、アプリの録音機能を作動させた。そつ
と柱の陰から、彼らの席のほうにかざす。

「フォン」という言葉が、時折、聞こえてくる。

「お客様、いかがなされましたか？」

気づくと、ホールスタッフが小穂の前に立ち、怪訝けげんそうな目を向
けていた。

「いえ、ちょっと、電波の入りが……」

小穂は適当に言って、スマホを胸もとに引き寄せる。

ちらりと男たちのほうを見ると、大槻と目が合った。まさかここ
に小穂がいるとは思わなかったのだろう、初めて見ると言ってい
くらい、動揺の色が浮かんだ顔をしていた。

小穂は開き直り、彼をひとしきりにらみつけてやった。

それから、「大丈夫です」とスタッフが声をかけ、その場を離れた。

その後の約束は先方に連絡して場所を変えてもらい、丸の内ノブオーシーズンズで打ち合わせを済ませた。すべてのアポをこなし終えると、一昨日から夏休みに入っている花緒里に電話してみた。

「お休みのところ、すみません」

三十秒くらいの英語の音声データを送るので、聞き取れる範囲で、何の話をしているのか教えてもらえないかと頼んだ。

初めは面倒くさそうに応じていた花緒里だったが、例のビリー・リーの件だと言うと、へいいよ。送りな」と一転、乗り気になって応えた。

音声データを送り、オフィスに戻った頃に、花緒里から電話がかかってきた。

「ちよつと雑音がいっぱいあって聞き取りにくいんだけど、「フォー」のことを話してるのは間違いないね。経営を君に任せることは必ず約束するとか、戸ヶ里の目は確かだと思ってるからこそ、彼が推薦した君のことも信頼しているんだとか……そんな話をしてるよ」

「ちよつと待ってください」小穂は驚いた。「それって、戸ヶ里さんが大槻さんを「フォー」に紹介したときから、ビリー・リーの遠謀が入ってたってことですか？」

「十分、そう聞こえるよね」花緒里は言う。「戸ヶ里が絡んでるし、

ありえると思うよ」

「買収とか、そういう言葉は？」

「言葉としては出てきてないけど、経営を任せるってことは、そういうことですよ」

小穂は低くうなった。

ビリー・リーは「ウルソン」を手に入れたかったが、創業家に抵抗されて果たせなかった。「ウルソン」の創業家は、もっとイメージのいい企業が相手であれば、売ってもいいという考えだった。「インフィニティ」のブランド力アップとグループ巨大化のために何とかしたいと思っていたリーと、ちょうど「フォーン」のサーチ案件を抱えていた戸ヶ里が旧知の仲だったことで、ある企みが生まれた。「フォーン」も独自のブランド力があり、傘下さんかに入れて損はない。経営陣に自分の息のかかった人間を送りこみ、「ウルソン」を買収させたあとで、それもろとも「インフィニティ」傘下に引きこむ……そんな算段を立てたのか。

「ありがとうございます」

小穂は花緒里に礼を言って、電話を切った。

「フォーン」を離れているからといって、これはさすがに捨て置けない状況だと思った。

翌々日、小穂は実家に帰った。その前日にも仕事を早く切り上げて帰ろうかと思ったが、父に仕事が入っており、遅くまで帰らないということ、この日の帰省となった。

「お昼食べたら、お墓参りに行くわよ」

そう言っただけで台所で野菜を刻んでいる母に適当に返事をし、父の書齋を覗く。

父は机に書類を広げ、難しい顔をしていた。

「ただいま……お父さん、ちよつといいですか？」

小穂はゆっくりと部屋に入り、机の手前に置かれた小さなソファに浅く腰かけた。

「お帰り」父は顔を上げ、小穂を見つめたあと、少し困ったように咳せき払いした。「母さんには何も言っていないから」

「そう……」

「お前、金に困ってるのか？ 食えてないなら、強がらず、正直に言いなさい」

小穂は小さく笑った。

「大丈夫です……前と同じくらいは、稼げるようになったから。クラブでバイトしてるのは、ヘッドハンターとしての人脈作りのためです」

父は小穂の顔をじっと見ていたが、それ以上、ケチをつけること

はしてこなかった。

「何か困ったことがあったら、早めに言ってきたさい」

代わりにそんなことを言った。

「フオーン」のことで話があるんです」小穂は言った。「お父さん、

「インフィニティ」って知ってます？」

父は眉を動かした。「「インフィニティ」がどうした？」

「フオーン」を買収しようと考えてるんじゃないかと思っています」

小穂はストレートにそう言ったが、突拍子もない話に聞こえたの

か、父は眉をいっそうひそめただけで、何も言わなかった。

「「インフィニティ」トップのビリー・リーと大槻さんが、日本橋の

ホテルで会ってるのを見ました。話はかなり前から始まってたんだ

と思います。大槻さんがうちに……「フオーン」に入ったときから」

「入ったときから……？」

「その場には、「丸の内コンフィデンシャル」の戸ヶ里さんも同席し

てました。それから、ビリー・リーはかつて、「ウルソン」に買収を

打診したけれど、オーナー家に断られたことがあるっていう話も聞

きました。「インフィニティ」が「フオーン」を傘下に収めれば、自

然と「ウルソン」も手に入ります。「ウルソン」を「フオーン」傘下

に入れたのは、言うまでもなく大槻さんです。大槻さんとビリー・

リー、さらには戸ヶ里さんもつながるとするのなら、この策略が

かなり前から立てられたものだと分かると思います」

父は、眉間に皺しわを刻んだまま、黙りこんでしまった。

「インフィニティ」からのアプローチは、まだないですか？」小穂は訊く。

「……大槻くんを通して、出資の申し出はあった」

「それはただの出資じゃありません。「インフィニティ」が何の目的もなく、「フォン」に出資したいと言うわけがありません」

「もちろん、俺もそうは思っていない。だから断った。終わった話だ」

「いつの話ですか？ 昨日今日でないなら、向こうはまだあきらめてないことになります。「フォン」の経営は大槻さんに任せたいとまで、ビリー・リーは踏みこんで言ってるんです」

「何……？」

さすがに、父の顔色が変わった。

「大槻さんを問い質たしてみれば分かると思います。黙ってたら、向こうもどんな手を打ってくるか分かりません。敵対的買収いどだって厭いとわないのがビリー・リーという経営者です」

父はしばらく考えこんでいたが、やがて、「分かった」と小さく呟ささやいた。

「訊いてみよう」

以前だったら、適当にあしらわれていたかもしれない。この一年

で小穂の話にそれなりの説得力がついたか、あるいは父自身、小さな疑念を持っていたのか……早速、電話を取ると、父は大槻にかけたようだった。

「鹿子だ。お疲れさん。今日はどうしてる？ そうか……ちよつと話があつて、午後にも、うちのほうに来てもらえないかと思ってるんだが」

大槻が了解の返事をしたらしく、父は「頼んだ」とだけ言って、電話を切った。

お墓参りは後回しとなり、昼になって母の手料理を食べたあとは、大槻が来るのを待つこととなった。父からは、小穂はとりあえず同席しなくていいと言われたため、一時をすぎて大槻がこの家を訪れたときも、小穂はダイニングテーブルに着いたまま、二人の話し合いが終わるのを待った。

「小穂」

大槻がやってきて二十分ほど経った頃、父がダイニングに顔を出した。目配せで来いと合図する。

小穂は唇を結んでうなずき、父に続いて彼の書斎に入った。

ソファに腰かけた大槻と目が合う。一昨日会ったときとは違い、大槻は澄ました表情を崩さなかった。瞬間、白を切ったしたと察した。

「大槻くんが説明したいらしい」父が言う。

「小穂さんは誤解されているようです」大槻が落ち着き払った口調で言った。「何やら、私が隠れて悪巧みわるたくをしているかのよう

に考えているようですが、そうではありません。「インフィニティ」からの出資の意思は、そのまま社長にお伝えしています。社長が現時点では受ける気がないということなので、それもそのまま、ビリーに伝えました。ただ、彼の性格をご存じかどうか知りませんが、簡単にはあきらめない男でして、感情的になれば、敵対的買収のような強硬手段に出て、うちを引っかき回さないとも限らない。まあ、現時点では、そういう段階ではなく、何か「フォン」とビジネス的に協力できる道がないか相談に乗ってほしいと言われていただけですし、それさえ断るのは大人げないというものです。ですから一昨日は、彼の求めに応じて会い、ああでもないこうでもないという彼の話を聞いていた……それだけのことなんです」

小穂は巧みな言い逃れの言葉を聞きながら、じっと彼をにらみつけていた。

「ビリー・リーは大槻さんに経営を任せたいっていうような約束の言葉も口にしてましたよね？ 協力できる道とかそんな生やさしい話じゃなく、買収の計画を練ねってたんじゃないんですか？」

「あんな場所でよく話の中身まで聞き取れましたね」大槻は軽く嫌味を口にするように言った。「そんな話があったかどうか、私は正直、

憶おぼえてません。あの人は話が興きように乗ると、現実的ではないことまで、
どンドンリップサービスのようにして喋しゃべってしまふんです。彼のこ
とをよく知っている人間は、そういう部分は本気にしません。彼の
英語は訛なまりが独特で聞き取るのに神経を遣いますから、リップサー
ビスだと分かる部分は、私は適当に聞き流しています。

第一、買収なんてものは、強引に仕掛けてうまくいくもんじゃあ
りませんよ。もしビリーから本気で相談されたとしたら、私は「フ
ォーン」の人間としても、彼の一友人としても、断固反対します。
彼はこれまでに敵対的買収で成功したこともあったようですが、そ
れは相手企業があまりにも成長機会を逃した保守的経営だったり、
内輪揉うちわもめで中がぐらぐらしていたりして、株主から愛想あいそを尽つかされ
ていたという背景があつてのことです。「フォーン」がそんな簡単に
自分の手に入る会社だとは、彼も思っていないでしょう」

「思っていないからこそ、策を巡らし、あなたを「フォーン」に送り
こんだんじゃないんですか？」小穂はなおも詰め寄るように言った。
「戸ヶ里さんがあの場にいたということは、あなたが「フォーン」
に入った時点で、そういう裏側があつたつてことじゃないんです
か？」

「馬鹿な」大槻は笑いながら首を振った。「あの日、戸ヶ里さんとは、
たまたまあそこで会つたんですよ。彼も過去に「インフイニティ」

の案件を手がけたことがあったらしく、ビリーに挨拶したいってことで、同席してたんです。彼はよくあそこのラウンジを使ってるようで、ばったり会ったことが前にもありました。

もう一人、ビリーの隣にいたのは、社長にもちゃんとお話しますが、投資銀行に勤める私の友人です。私は彼からビリーを紹介されたのであって、それは私が「フォーン」に入ってからのことです」

「戸ヶ里さんが推薦した人物であるからこそ、あなたを信用していると、ビリー・リーは話してました」

「それは、私と戸ヶ里さんの間柄がそういうものだと、あとになって知ったから、事実として言ってるだけで、彼が裏で糸を引いていたとかそういう話ではまったくありませんよ」

追及材料が尽き、小穂は彼をにらむことしかできなくなった。

うまくかわされてしまった。

「そのへんでいいだろ」

父が話を引き取るように言った。

「どちらにしろ、「インフィニティ」の提案がどのようなものであれ、うちがそれに応じることはない。大槻くんも、彼に曖昧な返事をしているなら、それが気を持たせることにもつながってしまう。あきらめるべきだということは、はっきり言わないと駄目だ」

大槻は一呼吸置いてから顔を伏せ、「分かりました」と小さく応えた。

また負けた……。

小穂は墓参りと、家族そろっての外食を済ませると、夜になって吉祥寺のマンションに戻り、ベッドの上で敗北を噛み締めた。

中途半端な忠告で、父には逆に迷惑をかけた形となってしまうた。ただ、父は大槻が帰ったのちも、小穂に何か文句を言うようなことはしなかった。父もこんなことを問い質して、大槻との間にわだかまりが残っただろうが、小穂の意見を受け入れてそれをしたこと自体は後悔していないようだった。

考えようによっては、大槻には釘を刺せたし、父には注意喚起ができた。意味は十分あったと思いたい。

「フオーン」のことをいったん頭から追いやり、サーチの仕事に集中しようと思いを切り替えたお盆明けのその日、「ジェレミア・ジヤパン」の三浦から、オフィスに来てくれないかという連絡が届いた。アメリカ本社での面談の結果を報告したいという。

誰もエドワードのお眼鏡に適わなかったという、まさかの事態でもない限り、次期社長の内定者が決まったようだ。

セミナーから三カ月弱。ここまではすべてがスムーズだった。自分が全力でこの仕事に当たり、クライアント側も、社運を懸けたこの案件に神経を集中させて臨んだ結果でもあるだろう。泣いても笑っても、あとは結末を見届けるだけだ。

小穂は午後三時の約束の時間が近づくと、緊張を胸の内に隠しながら、青山へと向かった。

「お待ちしておりました」

いつものように、三浦が受付まで迎えに来てくれ、社長室へと向かう。

「どうぞ」

三浦が開けてくれたドアから社長室に足を踏み入れると、応接ソファに腰かけたクリスの姿が目にとまった。

その手前には、スーツ姿の男が小穂に背中を向けて座っていた。

その男が振り返る。

畔田だった。

不意をつかれ、一瞬、思考停止のような状態になり、小穂は立ち尽くす。

クリスが穏やかな笑みをたたえて立ち上がる。ジュエスチャーで畔田にも立つよう促し、小穂に声をかける。

「ショウカイシマショウ。〔ジェレミア・ジャパン〕ジキシヤチヨウ

ノ、トモユキ・クロダ、デス」

見ると、畔田も小穂に笑顔を向けている。彼は小穂に歩み寄り、右手を差し出してきた。

「ありがとう。君の尽力のおかげで、こんな素晴らしい仕事を任せてもらえることになったよ」

「お、おめでとうございます」

小穂は差し出された彼の手を握った。

「君の熱意に報いるためにも、全力でこの任務に当たることは約束する。だから、引き続き、「ジェレミア・ジャパン」と僕の味方になつてもらえるかな」

新しい仕事を持った彼は、いつもの優しげなだけの目ではなかった。凛々しく見えて、それがいつそう、小穂には嬉しかった。

「もちろんです」

この仕事をやっていてよかったと思う瞬間があるが、今日は格別だった。

気力と能力を兼ね備えた人間に、相応の仕事が任される。それはその人物を大きく成長させ、そしてまた、所属した組織をも成長させる相乗効果を生むことになる。

その歯車を前へと動かす一助を担うことができた……小穂は手を上げて叫びたいくらいの喜びを、ぎゅっと噛み締めるようにして感

がい みた
慨に浸った。

お茶を飲みながら、しばらくクリスマスや畔田らと歓談したあと、小穂は一人、「ジェレミア・ジャパン」のオフィスを離れた。畔田は引き続き、クリスとの打ち合わせがあるということで、その場に残った。正式な社長就任は十月からとなるようだが、早くも「ジェレミア・ジャパン」の一員となったようでもあった。

小穂自身、まだ祝い足りないような思いもあったが、また別の機会があるだろうと頭を切り替え、一人になってからは気持ちを引き締め直した。

西内や高井も、アメリカ本社の最終面談まで行って落とされたかには、それなりにショックを受けるだろう。優秀な人材で、今後もある有力なキャンディデイトになってくれる人物であるだけに、しっかりとフォローしておかなければならない。

小穂はまず西内に電話し、選から洩れたことを伝えた。西内はどこか予感があったのか、「そうですね」と、淡々と受け止めていた。「やっぱり、乗馬がネックでしたね」西内は言った。「実際、あんなでかい動物を前にすると、なかなか冷静でいるのは難しいですよ。まあ、縁がなかったと思うしかないですね」

そうこぼす彼に、小穂は元気づける意味でランチの誘いを向けて

みたが、今はその気にもなれないようで、しばらく時間を置いて誘い直すことにした。

高井のほうは、それなりに自信があったらしく、小穂がおずおずと選考の結果を伝えると、しばらく無言になってしまった。

「残念会といえますか、近々お時間があれば、ご飯でもいかががでしょうか？」

そう小穂が切り出すと、今日の夜なら空けられるという。シヨツクがまだ生々しいだけに、何も今日でなくてもとは思ったが、すぐ手当てしたほうが高井の気持ちも落ち着くのであればと、小穂は電話を終えて、早速店を探すことにした。

「選ばれたのは、いったいどういう人なの？」

その日、銀座のダイニングバーで酒席をとにした高井の飲みっぷりは、痛飲と呼ぶに相応しいものだった。小穂が夜のバイトで培った心配りでもって、ビールから日本酒からワインからせせとグラスに注いでいくのを、彼はどんどん飲み干していった。

「その人は、鹿子さんから見てどうなの？ 俺と比べて、やっぱり優秀なわけ？」

答えにくい質問もいくつか飛んできたが、気持ちは痛いほど分かるので、小穂はなだめるようにして彼の話につき合った。

「もう一軒、もうちょっとだけ頼むよ」

高井にそう請われ、小穂は彼の行きつけだというワインバーにも付き合った。

さすがというべきか、酔いが醒めた様子はなかったのだが、二軒目に入ると、彼は拳動に落ち着きを取り戻した。身体に溜まった毒を一通り吐き出したような気分だったのかもしれない。

「まあでも、大丈夫だよ。俺もこういうことは何度も経験してきたし、自分の価値が否定されたなんてことは思っていないからさ」

「もちろんですよ。単に縁がなかっただけです。またいい話があったら、すぐに持っていきますから、楽しみにしてください」

「うん。今回はこういう結果になったけど、鹿子さんには礼を言うよ。俺もヘッドハンターは何人か付き合いがあるけど、あんたは若くても立派だ。負けたキャンディデートに寄り添って、こうやってすぐさまフォローするなんてことは、なかなかできるもんじゃない。優秀そうなヘッドハンターほど、残念でした、また連絡します、の一言であっさり終わらせるもんだよ」

「いえいえ、お褒めいただくほどのことはしてないんですが、本当に、今回だけのお付き合いだとは思ってませんので」小穂はくすぐったい思いで恐縮しながら応える。

「お父さんの会社が大変なときに、こんなふうにつき合わせて悪か

ったね」

「え？」

唐突に出てきた言葉に、小穂はきよんとした。高井は、小穂が「フオーン」社長の娘で、かつてその取締役を務めていたということを知っている。

「インフィニティ」のニュース、見てないの？」

「何ですか？」ざわりとした胸騒ぎを感じながら訊く。

「インフィニティ」が「フオーン」の株式の十何パーセントかを買ったことが明らかになって、ビリー・リーが夕方、コメントを出したんだよ。株はさらに買い増す用意があつて、「フオーン」とは何かの形での提携を模索していきたくって」

とうとうビリー・リーは、力づくで父を振り向かせようとする手に打って出たようだ。

「買い増しの手段や限度には言及してないんだけど、あらゆる可能性を排除しないってわざわざ断つてることから、TOBも考えてるんじゃないかって見られてる。明日の「フオーン」株は思惑買いでストップ高だろうけど、お父さんは大変だよな。下手すりゃ、乗っ取られる可能性があるってことだからね」

小穂は胃のあたりがぎゅっと締めつけられるような不快さを意識する。恐怖感と言ってもよかった。

相手は事業規模二兆円の巨大グループを率い、世界の富豪番付にも名を連ねる男だ。

そんな男が百分の一にも満たない力の「フォン」を、あらゆる手段の可能性を排除せずに、ものにしようとしている。

警戒していたからこそ父にもそれを伝えていたのだが、いざ相手が動き出したとなると、そうした警戒心では、まったく十分でなかったようにも思う。

大丈夫だろうと楽観視することはできない。

6

「失礼します」

社長室に入ってきた大槻の姿を認め、隆造はパソコンの画面を閉じた。自社の株価を確かめてみたが、やはり、ストップ高の値で張りついており、市場の関心が高いことだけは分かった。

「インフィニティ」の件で報告したいことがあると言って現れた大槻に対し、隆造はいつものように、応接ソファに移動して向かい合う気にはなれなかった。動かない隆造を見て、大槻は仕方なさそうに、執務机の前に立った。

「レッキー・エバンズ」の友人を通じてですが、ビリーから連絡が

「ありました。社長との面会を求めています。「フォン」株の保有について、向こうの意図を率直に説明したいとのことですよ」

隆造は無言で、ただ大槻を見つめる。

「これについては、拒否することは必ずしも得策ではないと考えます。実際に会って、向こうの出方を見るべきだと進言させていただきます」

「会ってどうするんだ？」隆造は言う。「出方もくそもない。向こうは結局、買収を考えてるんだろ。それでいて、会うと言ったら笑顔で現れて、握手を求めてくるんだろ。そんな茶番に付き合うつもりはない」

「それはさすがに、ビリーをイメージだけで判断しすぎていると思います」大槻は言った。「彼は決して、人の感情の機微が分からない男ではありません。相手の神経を逆撫さかなでするような振舞いは取らないと思いますし、ビジネスに徹した話し合いを望んでくるだけだと思います」

「君はいつたい、どちらの味方だ？」

隆造は、胸の内に押しとどめていたはずの疑念を口にしていた。

「もちろん私は社長の部下であり、「フォン」の取締役ですから、こちら側の人間以外の何者でもありません」

その答えは思った以上に芝居がかかって聞こえ、隆造は額面通りに

受け取れない自分を意識した。

「そのような質問は、はなはだ心外です。私はいつも、この会社の利益のことを考えて行動しているつもりです」

強い口調で不満を口にする大槻を、隆造は冷ややかに見る。

「インフィニティ」が「フォン」株を一三・五パーセント買い占めていることが証券の大量保有報告書によって明らかになり、ビリ・リーがこの件についてコメントを発表した……昨日の夕方、そんなニュースを真つ先に隆造に伝えに来たのは、財務担当者でも証券会社の人間でもなく、この大槻だった。

「インフィニティ」のどんな提案にも応じるつもりはない……先日隆造が言い放った言葉を、大槻はリーにそのまま伝えたいらしい。それが今回のこの動きの引き金になった可能性は、残念ながら高いと言わざるをえない……大槻は、それ見たことかとも言いたげに、そんな見解を口にしてみせた。その面持ち^{おも}はどこか勝ち誇っているようにも見え、隆造はこの男の心中を今さらながら^{いがか}訝ったのだった。「このような状況になれば、一度、先方と会ってみるべきだと思います」

「ほっとけばいい。TOBでも何でも、来るなら来いだ。機関投資家だけじゃなく、うちは“フォアニスト”の個人投資家も多い。友好的株主をしっかりと押さえておけば、過半数を取られることはない

んだ」

大槻は首を振った。

「過半数を守ればいいという問題ではありません。向こうがあと二〇パー買い増せば、三分の一を握られることになる。おそらくそれは、ビリーの決断一つでどうにでもなることでしようし、今の二三・五パーという数字は、その気があることを匂わせていると言ってもいいものだと思います」

確かに……三分の一を握られれば、手足を縛られた状態で会社を経営するようなものだ。

「社長」大槻は言う。「私はビリーとコンタクトが取れる人間です。その私を、このルートを、活用しない手はないと思います。何もしないでいては、事態は悪化するだけです。取り返しがつかないことにならないうちに、相手の出方を見極めて、対応を考えるべきです、そのためには、一度、お会いになることを強くお勧めします」
隆造は目を閉じて黙考する。三分の一を握られる以前に、すでにもう、手足を縛られつつあるような閉塞感を覚える。

「分かった……会ってみよう」

隆造は吐息混じりに、そう返答した。

世界中を飛び回っているリーの次の来日に合わせ、会談は翌週に

セッティングされた。

隆造はマンダリンオリエンタル東京に大槻と向かった。会談場所として指定されたのは、小穂が彼らの密談を見かけたというラウンジではなく、三十六階のスイートルームだった。

豪華なスイートルームのリビングでは、ビリー・リーと、「レッキーエバンズ」日本支社の菅山すがやまという男が待っていた。ほかに「インフィニティ」の関係者らしき人間が何人かいたが、会談が始まると別室に引っこんでいった。通訳はおらず、菅山がその役割を担った。

「お目にかかれて光栄です。ビリーと呼んでください。隆造、あなたが作り上げた「フォン」という企業、ブランドは知れば知るほど素晴らしい。スペシャリティーであり、エレガントです。私はすっかり惚ほれこみました。それが、あなたの会社の株を買った理由のすべてです」

握手を断り、硬い表情を崩さない隆造に対し、リーは友好的な雰囲気を一人で演出するかのように笑みを絶やさず、派手な手ぶりをつけながら、話しかけてきた。

しかし、その目がまるで笑っていないのは、じっくり観察するまでもないことだった。

「あなたの狙いがどこにあるのか教えていただきたい」

隆造はストレートに切り出した。

「あなたとパートナーシップを結ぶことです。お互いの利益になる道を模索したいと思っています」

「具体的にどんな形のをイメージしているのか教えてもらいたい」

「フオーン」のよさを「インフィニティ」が吸収し、「インフィニティ」の勢いに「フオーン」も乗っていく……そんな関係性です」

腹の内の一割も見せていないような曖昧な言い回しに、隆造は首を振る。

「具体的に言ってもらわなければ何も分かりません。お茶を濁す^{にじ}ような話を聞きに来たんじゃないんです」

抗議調の言い方はリーにも伝わったようだ。わずかに笑みが引きつり、菅山に訳してもらおうと、彼は小さくうなずいた。

「あなたは具体的な話より前に、大きなビジョンや経営者としてのミッションを大事にされる方だとお聞きしていたので、こういう話から始めさせていただきました。」

リーはしきりと「リ्यूゾー」とファーストネームで呼びかけているが、冷ややかな空気を感じ取ってか、菅山は最初以外「あなた」としか訳さないでいる。

「もちろん、具体的な話もやぶさかではありません。ただ、まず申

上げたいのは、私は「フォーン」をここまで育ててきたあなたの手腕を評価しており、どうなろうと、「フォーン」はあなたが引き続き経営されるべきであると考えていることです」

本題に入る前に、あえて相手の地位を約束する言葉を送ってくるあたりに、隆造は彼がその手に隠し持っている刃やいばの切っ先を見た思いがした。

「この世界、どれだけのブランド力を持っていたとしても、その企業単体でダイナミックな成長を持続的に遂げていくのは難しいものです。強いブランドほど寄り集まってグループを形成し、数や規模を味方にして大きな果実を取ろうとしているのが世界の潮流です。その流れに乗り遅れば、彼我ひがの差は開いていく一方です。例えば、あなたの会社と「ザ・サザンクロス」の五年前と今を比べれば、そのことはたやすく理解できるでしょう。日本市場に限っても、差は開いてしまっている。

ですから私は、あなたの会社を私のグループに招きたいと思っています。規模の戦いは私に任せてもらえばいい。私はその勝ち方を知っています。あなたのやることは何も変わらない。資本が充実し、経営戦略の選択肢せんたくしは今よりずっと広がるでしょう。グループの一員となった会社にはうちから役員を送るのが定型ですが、「フォーン」には旧知の大槻氏がいる。私は彼を信頼していますから、そうする

必要もないと思っています。結局のところ、あなたの経営環境は何も変わらないということですよ」

話している間にも、リーは余裕の笑みを取り戻し、隆造の反応をうかがうように自信たっぷりの視線を向けてきた。

「グループに招くということは、つまり、うちの過半数の株を握りたいということですか？」

イエスとリーが答えたのが分かった。

「率直に言えば、そうです」

「お断りします」隆造は言下に応えた。「うちはこれまでも独立独立でやってきたんです。「インフィニティ」であろうがなかろうが、何かの色が混ざれば、「フォーン」は「フォーン」でなくなる。巨大企業の後ろ盾が必要ほど弱つてもいないし、今、成長度合が鈍っているからと言って、焦っているわけでもない。おたくの助けがなくても、うちは勢いを取り戻します。「ウルソン」が欲しいならくれてやってもいいが、あいにく、デメル家があなたを嫌っているというから、それも無理がある。だから、あきらめてもらうしかない」

リーの表情が再び強張った。

「「ウルソン」が欲しくて、この提案をしているわけではありません。あくまでも私は、「フォーン」に魅力を感じているのです」

「同じことです」隆造は言う。「世の中、いくらお金があったとして

も、欲しいものすべてが手に入るわけじゃない。子どもでも分かる道理を、あなたは理解すべきだ。私はたとえ、「インフィニティ」と等価交換すると言われても、「フォン」を手放すつもりはありません」

昔山の通訳を聞き、リーは鼻から大きく息を抜いた。しつこく作り続けていた笑みも、すっかり消えてしまっていた。

「大槻くん」

ビリー・リーとの会談を終えて会社に戻ってきた隆造は、大槻をそのまま社長室に呼び入れた。

「今すぐじゃなくてもいいが、向こうが冷静になった頃、株の買い取りを打診してみてください。このところの相場に少し色を付ければ、向こうも小遣い稼ぎくらいにはなる。文句はないだろ」

「資金はどうするんですか？」

「債務超過にならなきゃ、何だっていい。俺が自分の株を売って、その金で買ったっていい。とにかく、向こうにはお引き取り願うってことだ」

「ビリーが簡単に応じるとは思えません」大槻は硬い表情でそう言った。「強硬策に出てくる可能性も十分考えられます」

「そうならないように、うまく交渉するのが君の仕事だろ！」隆造

は一喝^{いっかつ}した。「向^{むか}こうの言い分ばかりを立てようとするな」

大槻は小さく唇を嚙んで、目を伏せた。

「私は今日の結果を残念に思っています」

「何だ……愛想を尽かしたとでも言いたいのか？」

隆造の厳しい問いかけに、大槻は答えなかった。

「君はまだ、「フォン」がどんな会社なのか分かってないようだな。使える金さえ増えればいいってもんじゃない。頭を冷やしてきなさい」

大槻は唇を結んだまま、静かに社長室を出ていった。

隆造はマスコミ向けに、「インフィニティ」の傘下に入ることはもちろん、業務提携する考えもないことと、TOBなどの手段に対しては、あらゆる策を駆使して対処するつもりであることを発表した。それに伴い、思惑買^{しぼく}い^いされていた「フォン」株は大幅に反落した。しかし、事態はそれで収束しなかった。翌週、新たに提出された大量保有報告書から、「インフィニティ」がさらに五パーセント近く「フォン」株を買い増したことが明らかになり、再び株価は上昇に向かった。

隆造は上場時に主幹事を務めた「東都証券」をアドバイザーにして、連日対策会議を開いた。「東都証券」の分析では、「インフィニ

「テイ」に過半数を取られる見込みは低いものの、三分の一を超えて、筆頭株主に躍り出る可能性は十分あるとのことだった。その場合、業績の低迷や低い配当などを問題にして経営改革を迫ってくるということが考えられ、長期にわたって頭痛の種になるおそれが出てくるという。

ただ、過去のビリ・リーの戦略からすれば、物言う株主にとどまることは考えにくく、一気呵成に攻め出て過半数を取りに行き、それが叶わなければ、あつさり撤退して次の標的に狙いを定めるパターンが多いようだ。

だから、隆造としては、何とかこの嵐をくぐり抜けて、平穏な日々が戻ってくるのを待ちたいという思いだった。

そんな落ち着かない日が続く中、八月も終わりが見えてきて、最後の週末がやってきた。

前日の明け方には台風が関東に接近し、オートキャンプ場もキャンセルが相次いだ。その土曜日は晴天にも恵まれ、区画はすべて予約で埋まったという日報も届いていた。

その日の夕方、社長室にこもっていた隆造の携帯に、オートキャンプ場支配人の坂巻から電話がかかってきた。

〈社長、申し訳ありません〉

泣き出しそうな声でいきなりそう切り出され、隆造は眉をひそめる。

「どうした？」

「事故が起きました。川のほうで……今、男性二人が救急車で運ばれていきましたが、二人とも意識がないようです」

「どういう事故なんだ？ 分かりやすく説明してくれ」

「増水した川を渡ろうとして、車が横転したようです。乗っていた二人がそのまま水に呑まれ、レスキュー隊を呼んで助け出したんですが……申し訳ありません」

「謝るのはあとでいい！」 涙声になってしまった坂巻に一喝し、詳しい説明を求める。「四駆コースか？」

キャンプ場には、四駆専用のちよつとしたコースが用意されている。ダートや激しいアップダウンのあるオフロードが楽しめるのだが、その中に、キャンプ場の一角を流れている溪流けいりゅうを、水しぶきを上げて横切るポイントもある。四輪バギーを貸し出しているが、利用客の自家用車でも利用可能である。ただ、急勾配きゅうこうばいのヒルクライムなどがあるので、四駆であることが条件だ。

「はい……四駆コースです」

「増水してたのに、ロープを張ってなかったのか？」

普段は水深にして、せいぜい二、三十センチ程度の川だが、大雨

が降れば簡単に水かさが増し、何より流れの勢いが尋常ではなくなる。

だから、上流部で少しでも雨が降れば、川を横切るポイントには進入禁止のロープを張ることになっている。

「もちろん台風の前からずっと張ってました。今朝もステーション近くの流れを見た限り、まだ水位は高かったんで、もう一日か二日、様子を見ようと、ロープはそのままにしてみました。ただ……」

「ただ……？」

「今日は実際、コースまで行って、ロープが張られたままなのを確認したスタッフはいなかったの……というのも、事故のときには、ロープは杭から外れた状態になってまして……」

「台風で外れたかもしれない？」

「台風明けの昨日、スタッフが確認してるんで、直接の原因ではないと思いますが、もしかしたら、結束が緩ゆるんでしまっていた可能性はあるかもしれません……」

隆造は顔をしかめ、苦悶くもんの息を吐いた。

四駆コースの川の手前には、小高いヒルクライムのポイントがあり、川の水位がどの程度かは見通せない。ヒルクライムのポイントを登ってしまうと、バックで引き返すのは逆に危険でもあるので、多少水位があると分かってても、そのまま下って川を突っ切ってしまう

おうということになる。だから、水位が高いときには、ヒルクライムの前で進入禁止のロープを張っているのだが……。

キャンプ場内で起きたトラブルは、基本的に利用客の自己責任を謳うたっており、運営側としては一切関知しない立場であるのが建前である。

しかし、管理の不徹底が引き金になっているとするなら、道義的にも無関係を決めこむことはできない。

もちろん、今は何より、事故に遭あった客の救命が叶うことを祈るのが先ではある。その中で、いろんな可能性を想定して動かなければならない。

隆造は電話を切ると、役員を招集し、会議室に対策本部を構えるよう命じた。

そして副社長の深谷ふかやを青梅おうめのオートキャンプ場に派遣し、さらなる情報収集と現場対応の指揮に当たらせることにした。

病院に運ばれた二人のうち、運転手と見られる一人の死亡が確認されたのは、夜になってからだだった。

その報告を現地に飛んだ深谷から聞かされ、会議室には重苦しい沈黙が落ちた。

へただ、進入禁止のロープなんです、彼らが故意に外した可能性

もあるようです。キャンプに同行していた友人たちが走りを見学してたそうで、警察が事情を聞いてるところです。

電話のスピーカーから流れてくる深谷の報告を聞いて、大槻が低くうなった。

「勝手にロープを外して事故を起こされたんじゃない、こつちがいい迷惑だ。スキー場で立ち入り禁止のコース外に出て事故を起こすのと一緒に、運営側には何の責任もない。違いますか？」

彼は隆造の求めに応じて駆けつけてきた顧問弁護士まっねの松根に、詰め寄るように訊いた。

「そうだとすれば、おっしゃる通りですね」松根は答える。「仮に、何かの拍子ひょうしにロープが外れていたのだとしても、川を渡って大丈夫かどうかという判断くらいはできるはずで、キャンプ場のスタッフが、これくらいの流れなら渡れると勧めたのでもない限り、運営側が過失を負う事案ではないと考えます」

「安易に責任を痛感しているというようなコメントは出すべきではないですね」大槻は隆造をちらりと見て言う。

事故の詳細に関するマスコミ対応は、キャンプ場にいる深谷や坂巻のもとで行われているが、「フォン」が鳴り物入りで作ったキャンプ場での事故ということで、この本社にも、マスコミからのコメントが欲しいという電話が何本も届いている。

「まあ、お悔やみ的なコメントを、あまり他人事ひとことという感じにならない言い方で出しておく必要はあるでしょうが、変に謝罪してしまうと、それで「フオーン」が悪かったというイメージで固まってしまうから、そこは気をつけたほうがいいでしょう」

会社を守るためにはごく当然の判断なのかもしれないが、隆造は気持ちはまだそこまで付いていけていなかった。

自分の夢の実現と言ってもいいオートキャンプ場で、このような事故が起き、人の命が失われた……そのショックは小さくない。事故に遭ったのは、二人ともまだ二十代だという。仲のいい友人同士で遊びに来ていたのだろう。楽しいはずのオートキャンプが、取り返しのつかない悲劇に終わった。それを思うだけで胸が痛む。

「報道をチェックしましょう」

広報部長の峰岸みねぎしが会議室に液晶テレビを運びこんできてセットした。ニュース番組や情報番組に合わせていく。

各局とも事故の扱いは大きかった。事故現場の立ち入りは現在、制限しているが、救出活動の当時、ほかの客が撮ったと思われる動画などがいくつつか取り上げられている。増水した川の中で横転している車の様子やレスキュー隊の活動の様子などが断片的に映し出された。

現地から中継する記者は、売店や管理室があるキャンプステーション

ヨンの前に立ってリポートしている。看板に記された「フォン」のロゴがよく目立つ。

運転手の死亡が確認され、助手席に座っていた男性も意識不明の重体だと、記者は報告する。キャンプ場の運営会社の話として、川の前には進入禁止のロープを張っていたが、それが事故当時、どうなっていたかは確認中であるというコメントが紹介された。一方、事故に遭った男性たちと一緒にキャンプ場に来ていた友人の女性は、現場にロープが張られていた記憶はないと話しているらしかった。

「どっちなんだ」大槻が苛立いらだったようにこぼす。

その後もニュース画面を脇に見ながら、現場との情報のやり取りが続いた。新聞の朝刊の締め切りを前に、「フォン」本社としてコメントを出す必要があるかもしれないということで、弁護士の松根らと打ち合わせを重ねた。

夜半近くになって深谷から、同乗者は頸椎けいついを痛めるなど重症ではあるが、意識は回復し、命に別状はないという知らせが届いた。さらに少しして、進入禁止のロープはやはりちゃんと張られていたのが分かったという報告も上がってきた。

「事故の少し前にコースを走っていたほかのグループ客の話が取れました。ドライブレコーダーにも映っているそうです」

深谷の報告はさらに続いた。

（それから、事故に遭ったグループは、どうやら見学した友人女性がインスタって言うんですか、ネットに上げる動画を撮ってたようです。おそらく、格好いい動画を撮ろうとして、無茶を承知で増水した川を渡ろうとしたんじゃないかと……マスコミもそのへんの事情をつかんだようですから、うちとしても事故に関する正式なコメントを、あえて出す必要はないと思います）

事故は「フオーン」のオートキャンプ場だから起こったという類のものではなく、若者の無謀むぼうな行いが招いたものという見方に落ち着きそうだった。

もちろん、だからといって、彼らばかりが悪いと切り捨てられるものではない。

これまでも、バーベキューや花火などで大騒ぎし、近隣キャンパーに迷惑をかける若者客は問題になっていた。しかし、そういった行為については、運営スタッフや筋金入りの「フオーニスト」であるベテランキャンパーたちが遠慮なく声をかけることで、正しくという風習が出来上がりつつあった。「フオーン」のオートキャンプ場は、キャンピングのマナーやノウハウをベテランからビギナーへ伝え、教育、啓蒙けいもうしていく場でもあったのだ。

今回の件は、その形が機能しなかったという言い方もできる。

しかし、そんなことを思う一方で、会社を守らなければならない

立場である以上、利用客の暴走であり自己責任というほかない形に収まることについては、ほっとする気持ちがないと言えば嘘になるのだった。

そうした理想と本音が隆造の中で対立し、互いを傷つけ合っている。だから、どんな知らせを聞いたとしても、心から気分が晴れることはない。「フオーン」のキャンプ場で痛ましい事故が起きたという事実は変わらない。

「まったく、人騒がせだ……」

隆造の思いをよそに、大槻は、もはや大方の問題は処理がついたかのように、そう呟いている。彼だけでなく、ほかの役員連中の顔にも深刻な色は消えつつある。

どこか緊張が緩んだ空気の中、テレビでは、また新たなニュース番組が始まっていた。

キャンプ場の事故がここでも取り上げられている。

川の流^るれに呑まれ、横倒しになった車が映し出される。

隆造がおやと、その映像に引っかけかかりを持ったとき、誰かがぼつりと言った。

「「スターゲイザー」か……」

事故に遭った車は、確かに「クラタ」の「スターゲイザー」だった。

日曜日、オートキャンプ場の水位が下がった川では、警察の現場検証や都の関係局の調査が行われた。

隆造も昼すぎにはキャンプ場を訪れ、現場を視察し、急きよ設しつちえた献花台けんかだいに花を手向けたたむ。

キャンプ場の一時閉鎖も考えたが、前日から泊まっているキャンパーも多い上、キャンピングエリアには特に安全上の問題があるわけではないので、四駆コースのみを閉鎖として、キャンプ場そのものは通常通り営業させることにした。大槻がたとえたスキー場に当て嵌めるなら、危険なグレンデ外に出て滑落したり雪崩なだれに巻きこまれるような事故があったとしても、グレンデが安全であれば、スキー場すべてを閉じる理由にはならないということだ。

一方で、事故に遭った男性の親族や知人などの関係者には、献花台への案内など、丁寧な対応を徹底させた。無謀な行為で命を落とした馬鹿な若者という、世間で固まりつつある冷ややかな見方を現場に持ちこむことはさせなかった。

世間の「フォーン」に対する評価は、ネットなどを中心に広報部長の峰岸にウオッチさせていたが、憂慮ゆうりよしなければならぬほどのネガティブなものはないようだった。

この一件は、このまま収束していくかと思われた。

しかし……。

「会社として、今回の事故に対する責任がないわけではないはずで
す」

週明け、対策本部で開かれた報告会議でそう発言したのは、大槻
だった。

「利用客の自己責任という形に無理に収めてしまうなら、早晚、そ
れを批判する声が上がってくるでしょう」

事故当日の言動と百八十度方向性を変えたような彼の意見に面食
らったのは隆造だけではなかったようで、会議の参加者は誰もが思
考が停止したような顔をして彼を見ていた。

大槻は極めて真剣な面持ちである。

「専務は何か、うちに対するネガティブな声を聞いているのか？」
隆造は訊いた。

「私の感覚では、少なからず巷ちまたで上がっているものと捉えています」
大槻は言う。「当初の想定以上であり、我々はこの事故に対する態度
を抜本的に見直さなければならぬのではないかという問題意識を
抱いだいています」

峰岸に目をやるが、彼は困惑した表情を浮かべているだけだった。
「どういう対応が必要だと考えてる？」隆造は大槻に訊く。

「社長ご自身による早い時期での記者会見があつてしかるべきでは

と思います。事故に遭われた二人への言及と、「フォーン」が運営している施設でそれが起こったことに対する一定の責任を認める謝罪を盛りこんだものが必要だと考えます」

低いなり声が上がる。顧問弁護士の松根がかすかに顔をしかめて腕を組んでいる。

「松根先生のご意見は？」

上場企業の不祥事対応の経験も豊富な彼に話を振ってみる。

「いや、私は今あえてそこまでする必要は感じておりません。会社としてのコメントは、公式サイトに載せたもので、今のところは十分かと思います」

「フォーン」の公式サイト及び、オートキャンプ場の公式サイト、それぞれに、今回の事故に関するコメントを昨日の時点で上げている。事故の発生を重く受け止め、世間を騒がせたことを詫びるとともに、亡くなった男性の冥福^{めいふく}、負傷した男性の回復を祈り、警察の捜査に協力して、再発防止に努めるとした内容である。

「世間的には、「フォーン」はあくまでもアウトドアグッズやウェアを売る会社であって、キャンプ場の運営は言ってみれば本流から外れたところにある事業だと捉えているんじゃないでしょうか」松根は言う。「今回の事故が「フォーン」のキャンプ場で起こったということが分かっても、そのまま、「フォーン」全体がけしからんと

「この意見にはなりにくい形だと思えますよ」

松根の意見は一貫していて、だからこそ、オートキャンプ場のサイトではトップページにコメントを載せているが、「フォーン」の公式サイトでは、「フォーン・オートキャンプ場の事故について」という小さな見出しをクリックすることでコメントが出る形になっている。それで必要十分だというのが彼の考えだ。

「「フォーン」の本業外の事故であるから、わざわざ社長が出ていて、問題を大きくする必要はない……本当にそうでしょうか？」大槻は思わせぶりに首をかしげてみせる。「オートキャンプ場の運営は、社長の肝^{きも}いりで始めた事業のほずであり、そこは、うちと「フォーン」をつなげる聖地と言ってもいい場所でもあります。そしてこれは、業界では周知の事実と言えるものではないでしょうか。アウトドアにそれほど興味がない人々には今の対応で通用したとしても、アウトドアファンには、また違う目で見られています。その層に「フォーン」は責任を取らないと思われたら、本業のほうまで早晩、苦しくなっていくと思えますよ」

「しかし、過剰に責任を痛感しているような態度を示すと、落ち度があったわけでもないのに、何かあったかのような勘^{かん}繰^ぐりを受けてしまいかねない……はじめをつけるにしても、程度問題というものがあります」松根は言う。「もちろん、最終的には社長の判断次第で

はありますが」

オートキャンプ場を社長である隆造の肝いりで作ったのは、その通りだ。「フオーン」本流の事業ではないから、社長である自分も知らんぷりをしていられるという論理が成り立つとするなら、それはそれで忸怩じくじたるものを感じる。

しかし、それとは別に、会社の対応としてはこのあたりが落としどころだろうと、隆造自身、判断を固めていたところだっただけに、大槻の態度の豹変ひょうへんには戸惑いが大きく、それをどう汲み取るべきか、すぐには考えが定まらなかった。

「現時点では、このまま様子を見ようと思う。専務の意見は検討課題として預かっておく」

隆造はとりあえずそう言って、会議を終わらせた。

事態が収まらない流れになりつつあるのを意識したのは、昼になってからだだった。株式市場の前場をチェックしてみると、「フオーン」の株価は先週末比で十パーセントを超える下落を見せていることが分かり、隆造はぎよっとした。

株価は、「インフィニティ」が買い集めていることが明るみになってから高値で推移していたため、一割や二割下がったところで何とということはないのだが、下落の理由はタイミング的に見ても、キャ

ンプ場の事故しか考えられない。市場関係のニュースを見ても、事故を嫌気いやきして大幅下落と書かれている。それ以外に分析しようがないだろう。しかし、事故によってこれほどの株主離れが起きているというのは、隆造としても頬を張られるような衝撃があった。

株価は後場に入るとさらに値を下げ、とうとうストップ安に張りついてしまった。

「社長、ビリー・リーがコメントを発表したようです」

ストップ安のまま大引けを迎えたあと、広報部長の峰岸が社長室に報告を持ってきた。

「うちとの提携交渉をいったん白紙に戻し、取得した株も大部分は手放す予定だと」

白紙も何も、こちらはノーを突きつけているのだから、当たり前のことである。このタイミングで人騒がせなどは思ったが、撤退してくれるなら安堵あんどする気持ちのほうが強い。ストップ安も事故が理由というより、ビリー・リーの動きが影響しているのではないだろうかと思った。

「その理由として、彼は事故の一件を上げてまして」

「え……？」

峰岸はメモに目を落として続けた。「今回の「フォン」の事故対応に、私は大きく失望している。会社として、事故に真正面から向

き合っていない。社会的責任から逃げようとしている。社長の顔が見えず、姿勢もはっきりしない。アウトドアビジネスを手がける企業として、コンプライアンス的に大きな問題を抱えていると感じた……と」

後足で盛大に砂をかけていったわけか……隆造は奥歯をぎりりと噛んだ。

「マスコミから、こちらのコメントを求められています。どうしましようか？」

「コメントもくそもない」隆造は吐き捨てるように言った。「うちは終始一貫、「インフィニティ」とはいかなる協力関係も結ばない考えを表明していたのであって、相手の行動に対していちいちコメントすることは無いと言えればいい」

「分かりました」

峰岸は素直に返事をしたが、すぐにはその場を辞そうとはせず、言葉を続けた。

「もしかしたら、彼のコメントが引き金となって、思わぬ逆風が吹くかもしれません」

リーが株を手放すのであれば、思惑買いも反動に転じ、株価はしばらく下落の一途をたどるだろう。既存の株主には不満が溜まり、マスコミも事故と結びつけてこの動きを取り上げるかもしれない。

そうになると、いずれは隆造も、何らかの態度を示さなければならなくなる。

「分かってる……」

隆造は苦しい胸の内を隠して、そう答えた。

峰岸が去ってしばらくしてから、社長室に電話が回ってきた。

「クラタ自動車」の羽村はむらからだった。

「社長、大変なときにこんな話をしなければならぬのは、まったく心苦しいんですが……」

オートキャンプ場で事故に遭った車が「スターゲイザー」であることがニュース映像によって広まっていることから、特別仕様車のプロジェクトに疑問を呈ていする声が大きくなったという。

「やはり、イメージ的な観点からも、プロジェクトをそのまま進められる状況ではないというのが、社内的一致した認識みちでありまして、道原みちはらとしても白紙にせざるをえないと……苦渋くじゆうの判断を下すことになってしまいました」

無念さをにじませる羽村の声を聞きながら、隆造は瞑目めいもくする。恐れていたことであつたが、やはり見逃してはもらえなかつたかという思いだつた。

「そうですか……」

力のない返事が、締めりを失つた隆造の唇から洩れた。

それから「フオーン」及び隆造を取り巻く環境は、つるべ落しのように悪化していった。

株価のストップ安が三日続き、逃げ場がなくなった隆造は、やむをえずして記者会見を開いた。その席上、事故について言及するとともに、オートキャンプ場の無期限営業停止を発表した。

しかし、タイミング的には遅きに失した感は免れず、しかも、頭を下げたからには一定の落ち度があるはずというイメージを世間に植えつけた一方で、具体的な責任について何も認めなかった点が姑息そくだと受け取られたようで、批判の声はむしろ勢を増したと言ってもよかった。当日、四駆コースには、各所に台風の跡である水たまりやぬかるみが残っていたことが確認されており、コース全体を使用禁止にすべきではなかったのかという疑問も会見ではぶつけられた。こちらとしては言いがかりとしか思えず、オフロードを何だと思っているのかと言いたくなるような話なのだが、それを正論のように受け止めている人々も少なくないようだった。

「フオーン」のワンマン社長が事故対応で失敗したあげく、提携交渉に入っていたビリー・リーの怒りを買ひ、さらには長年のユーザーからも愛想を尽かされ始めているとするネットの記事も上がった。

実際、騒動の余波は、実店舗の売上にも打撃を与え始めていた。

毎朝、営業本部長から送られてくる直営店舗の売上データが如実にそれを示していた。

「今回の事態については、非常に残念でなりません」

九月に入った翌週の経営戦略会議の席上、大槻が抑揚たつぷりにそう切り出した。

「私は先週初めの時点で、はっきりと事故対応の方針についての懸念を申し上げました。それは残念ながら、社長には聞き入れていただけなかったわけですが、今となれば、私の意見に理があったことは、さすがにご理解いただけるところだろうと思っております。社長は、この事態をどう考えておられるのか、ぜひお聞かせいただきたいと願います」

これまで、経営上の問題について、隆造の責任を問うような声を上げる者は誰もいなかった。しかし、今はそれを許してしまうほど、自分の権勢が衰えを見せているのだ……隆造はそんなことを実感させられた。

「対応については、その時点その時点で適切なものを取ってきたつもりだ」隆造は言う。「ただ、ビリー・リーの動きまでは読むことができなかった」

「ビリーにかき回されたと感じていらっしやるなら、私は、そうで

はないと申し上げたいところです」大槻は冷然とそう言った。「彼の失望は、「フォーン」のステークホルダー全体を代弁したものだと思っ
け取るべきです。事態は深刻で、このままだと今年度の営業は莫大ばくだい
な赤字を計上しなければならなくなるでしょう。いや、今年度だけ
にとどまらず、「フォーン」というブランドはもはや、存亡の危機に
立たされていると言っても過言ではありません。この先、社長がど
んな行動を取られるかによって、「フォーン」の行く末が決まるんで
す。その危機意識を何とかご理解いただきたい一心で、こうして僣せん
越な意見を言わせていただいております。ほかの方々も思うところ
はあるんじゃないでしょうか。この際、忌憚きたんのない声を上げられた
らいかがかと思えます」

畳みかけるように言ったあと、大槻は挑むように隆造を見た。

「……何かあれば」隆造は言う。

五人ほどの手がおずおずと上がった。取締役営業本部長の岸谷きしたた。
取締役経営企画本部長の畑山はたけやま。執行役員くどうの工藤みずもと、水元みづもと、半田はんた。

決して少なくはない。隆造はその数に圧迫感を覚える。自分ほこ
れだけの人間をすでに取りこんでいるのだというように、大槻の顔
が誇っている。

岸谷が営業部門の苦境を訴え、畑山が取引銀行の反応や財務関係
の窮状きゆうじょうを報告する。今回の事故対応は最善だったとは言いがたい

ように思う……彼らは台本を暗記してきたかのように、最後にそんな感想を付け加えた。

「話は分かった……それぞれの現場の厳しさも理解してるつもりだ。そこから抜け出すためにどうしたらいいか、私も必死に考える。だからみんなも、今は我慢のしどころだと思って、前を向いてがんばってほしい」

隆造は生返事のようにしてそんな言葉を返し、会議を終わらせた。会議のあとは、田中がいつものように社長室に寄ってきた。

「専務は、ビリー・リーの出方が分かってたから、先回りして懸念を口にできたでしょう。それを、あたかも社長に非があるかのような言い方をして、いったい何を考えているのか……」

田中は湯呑みを片手に、ぶつぶつと言っている。

大槻がリーとどのようにつながっているのかは分からないが、リーの出方は明らかに分かっていたと思われ、言い返そうと思えば、そこを突くことはできたはずだった。

しかし、今の隆造は、その力が湧き上がってこないのだった。それはなぜかと自身に問えば、やはり思い当たるのは、自分の夢に描いたキャンプ場で人の命が失われたという現実が動かせないことである。

運営的に落ち度はない。しかし、心情的には重い十字架を背負っ

てしまった。大槻やリーは、そこを容赦なく突いてきている。
疲れたな……隆造はそんなことをぼんやりと思う。

夕方、大槻が社長室を訪ねてきた。会議のときと同じ、勝負を挑むような目をしていた。

「会議でのぶしつけな言動については、どうかお許しいただきたい
と思います」

ソファに陣取り、隆造が執務席から向かいに移ってくるまで、呼吸すらしていないかのように鎮座ちんざしていた彼は、ソファに腰かけた隆造を正面に見据えて、まずはさらりと謝意を口にした。

「ですが、社内は世間の逆風を浴びて動揺しています。「フォン」が存亡の危機に立たされているというのは、私の偽いつわらざる感覚です。この会社の行く末には、社員二百二十人とその家族の人生が懸かっている。社長の個人商店というご認識では立ち行かないことをご理解いただきたいと思います」

「個人商店だなどと思ったことはない」

言い返した言葉は、自分の耳にも弱々しく届いた。

「ご英断を所望します」大槻はそう切り出した。「現状を乗り切る唯一の策を提案させていただきます」

「何だ？」隆造はかすれた声で訊く。

「ビリーから連絡が来ました。現状、株の放出を進めているところだそうですが、当社の窮状に関しては心を痛めているし、「フォーン」のブランドとしての価値はまだまだ高いものがあると評価しているということです。そこで彼は、当社を救済するための最終的な提案を私に投げてきました。ただし、それには条件があるということです。一つはその救済が、「インフィニティ」による「フォーン」株の過半数取得という形で行われるものであること、そしてもう一つは、混乱の責任を明確にし、世間に対して「フォーン」が生まれ変わったということをアピールするためにも、社内体制を一新すること」

リーの一気呵成に攻め出てきたような提案を口にした大槻は、一呼吸置いてから続けた。

「具体的には、鹿子社長の、代表権のない会長職への勇退を求めるということですよ」

反発心が湧いてこないことに隆造は戸惑う。

以前なら、考えるまでもなく、一言で切り捨てただろう。しかし今は、この話をはねつけたところで、勝ち筋は何も見えないのだという思いが強い。

「返事はイエスカノーであって、今回はもう、条件について交渉する余地は一切ないということです」

言い終えた大槻の唇が、かすかに吊り上がった。

〈つづく〉